

第2回IF学生成果発表会

2011. 9. 6

医学部1号館第2セミナー室

Signal transduction in host defense (生体防御とシグナル伝達) グループ

開会の挨拶

山本 雅之 教授 (医化学分野)

サイエンスとは DEBATE だということを覚えてもらうといいと思います。ディスカッションを通して論理を磨いていくことで初めてサイエンスになります。ですから、発表する人はもちろん真剣に発表してもらいたいと思いますが、聴いている皆さんは、その中で論理のあらや抜けはないか、実験はちゃんとやり遂げてあるか、データの足りないところはないだろうか、そういうことを良く見て、論理の戦いをさせていただきたいと思います。良い質問をして、会場の空気を和らげたり、引き付けたりというようなことが出来るようになったら大したものです。質問を受けてからは冗談の1つも言いながら、しかし、本質的なことをしっかりと答えられるように。そこまでの技術を身につけるにはまだまだだと思えますけれども、今日はいいい機会だと思って練習してもらえればと思います。サイエンスの共通言語は英語です。サイエンスの共通言語を身に付けるということで英語の練習をしないといけませんが、しかし、1番大切なのは正確にサイエンスの知識を伝えることです。今日のこの会は、乾先生と石井先生がコメンテーターとして参加して下さっています。こういう機会を持ってくれた人達に感謝しながらしっかりやってほしいと思います。では、楽しみにしています。



発表



解良 洋平 (生物化学分野)

「Methionine adenosyltransferase (MATII) -dependent writing of histone H3K9 methylation and repression of Cox2 gene」

今回、GCOE 発表会に参加して、他の研究室の方々の前で口頭発表をする機会を頂きました。発表の中でも、特に質疑応答に関して、私はとても苦手意識を持っていました。しかし、開会の挨拶にて山本先生が、研究において討論は最も大切なことである、ということをおっしゃっており、自分の考えを改めなくてはいけないことを痛感しました。今回のような貴重な経験を活かして、今後の研究に役立てたいと思います。



高屋 快 (医化学分野)

「Solid Demonstration of Multiple Sensing Mechanism of Keap1-Nrf2 System」

このたびは貴重な発表の機会を与您いただきありがとうございました。会の開催に御尽力いただいた関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

2009年6月より医化学分野にて研究を開始して早2年。もう成果を発表しなければと思うと「光陰矢のごとし」を実感せずにはいられません。学位申請前の追い込み時期にこのような発表会で発表しなければならないのは正直プレッシャーであり、さらに当日は英語発表ということで気が重かったのが正直なところですが、自分の研究成果をまとめて発表するのはこれまでの自分の行ってきたことを振り返るいい機会であったように思います。また、英語での発表も(当然ながら)あまりうまくはいきませんでしたが、そのような形で発表することが初めてであり、いい経験になったと思います。

相馬 友和（腎・高血圧・内分泌学分野）

「Luminal alkalinization attenuates proteinuria-induced oxidative damage in proximal tubular cells」

今回の IF 成果発表会は、「Signal transduction in host defense」というテーマのもと様々な分野で、いかに疾患の機序解明に取り組んでいるのかを知ることができ、私自身の研究へのモチベーションを高めてくれる貴重な発表会でした。他分野の方々に、私たちの研究内容の面白い点、まだ、未解決の点を伝えるために普段以上に練習して望んだ会でした。ディスカッションにおいて、どのような点を、他分野の方々が興味を持つのかという点を知ることができたのは、私たちの研究をより多くの方に興味深いものに発展させていくために重要なものでした。このような機会を与えてくださった御関係者の皆様に感謝申し上げます。



伊藤 亜里（生物化学分野）

「Bach family transcription factors are required for the development of pro-B cells」

まず、学位審査の前に、自分の研究を分野外の方がわかるようにまとめ、口頭発表する機会があったことが、大変ありがたかった。自分は転写因子による血球分化制御の研究をしている。いままで私は、ファミリー因子である2つの転写因子が分化にどういう役割を果たしているかということについて考えてきた。しかし、今回様々な質問やアドバイスをいただき、お互いにどのように機能を補い合っているかなど、転写の制御についても、もっと考えて行かなくてはならないと思った。また、異分野の方の発表では、患者さんの検体を質量分析で解析して、胆管癌の新しいバイオマーカーを探索する、臨床研究の発表が印象的だった。自分は基礎研究をしているが、その先には臨床があることを常に意識したいと思った。



鈴木 真紀子（免疫学分野）

「Induction of the humoral immune response in HLA-DR(0405) transgenic humanized NOG mouse」

私は免疫学で勉強させていただいております。今回のように多分野に及ぶ発表会に参加でき、研究背景、方法、解析から今後の発展へ向けてのプレゼンテーションと質疑応答ができる機会を得、本当に視野が広がる思いがしました。内容自体は難しく真の理解には及ぶことができなかった点もありますが、未知を既知へと変換させること、既知となることの面白さは共通だと感じました。自身の研究に対し様々な視点からのご意見を頂けたことに感謝しております。また普段は姿が見えませんが同じように日々過ごしている仲間存在も感じる事ができました。

幅広い分野の大学院生、先生方、拠点支援室の方々へ
貴重で有意義な時間を頂き、ありがとうございました。



中嶋 真治（血液免疫病学分野）

「Signals from myeloma cells to form the tumor niche」

今回の発表会では今までの研究結果をまとめるだけでなく、他分野の先生方にも理解しやすいようなプレゼンを練習するいい機会となりました。自分の発表に対する質問により、もう少し発展・解明させるべき内容について改めて考えることができました。他分野の先生方の発表を理解するのは困難なことが少なくなかったですが、非常に興味深く、いい刺激となりました。この経験を今後活かしていきたいと思えます。



前田 晋平 (消化器外科学分野)

「Novel Biomarkers of Cholangiocarcinoma Identified by Proteomic Analysis of Formalin-Fixed Paraffin-Embedded Tissues」

MS を基盤としたプロテオミクスにより同定された胆管癌バイオマーカーについて発表させて頂きました。18 分の発表でしたので、学位審査も意識しながらなるべく理解しやすいよう心掛けて準備しました。質疑応答では幸いにも多くのご意見を頂くことができましたが、やはり今後の検討課題として、同定されたタンパク質の機能・相互作用・意義などに対するより深い考察が求められます。他の先生方の発表では、その研究内容もさることながら提示の仕方、質疑応答の大切さなどを勉強させて頂きました。「なぜ」を大切に研究を進めていきたいと思えます。



閉会の挨拶

石井 直人 教授 (免疫学分野)



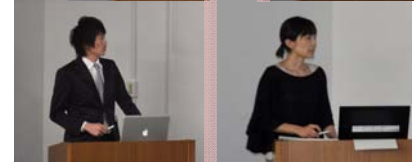
大変長い時間お疲れ様でした。皆さんの仕事のレベルが本当に高くて20年前の僕の時代とは全然違うなど、そしてこれならば東北大の将来は安泰だなと思いました。1人1人素晴らしい発表で感銘を受けたのですが、1つとても印象に残ったのは、山本先生の鋭い質問に反論で答えていた伊藤さんの態度です。「私のデータからはこの仮説があてはまるんだ」と、きっぱりと回答された姿が非常に印象的でした。偉い先生にどんな意見を言われても、研究者は自分のデータをこそ信じるべきで、それを持って回答されたところに研究者としてのあるべき姿を見たような気がします。僕自身も自分のデータを信じて自分の研究をしっかりとっていききたいなと思いました。



オーガナイザー・司会

乾 匡範 先生 (加齢研・遺伝子導入研究分野・講師)

討議時間を長めに設定したプログラムを企画し、進行して下さいました。爽やかな笑顔での司会で、発表者の緊張もほぐれたのではないのでしょうか。



異分野の研究発表を聞くことができ非常によかったです。個人的にも刺激になりました。質問をする人が(特に後半)ごく一部に限られていたので、もっと多くの学生さんからの質問があればよかったと思います。



大変お疲れ様でした。

